

中国野球の始まりと日中戦争が戦後の中国天津での 野球復活へ及ぼした影響

一日中戦争以前の天津の中国人野球と天津日本租界の日本人野球からみて一

松岡弘記*，樊孟**，李俊兰***

I. はじめに

中国天津市は直轄市であり、2017年に中華人民共和国第13回全国運動会^{注1)}がこの地にて盛大に開催された。この全国運動会の野球競技には、2002年に中国に発足したプロ野球のCBL (China Baseball League : 以下CBL)^{注2)}に参加している北京、上海、天津、江蘇、四川、広東の6チームが参加し、地元の天津ライオンズ^{注3)}が優勝を遂げた。

筆者は2001年、天津市にある南開大学へ学部業務で出張し、南開大学周辺の体育施設を調査した。その際に天津体育学院道奇棒球场 (写真1と2)^{注4)}を訪れ、天津体育学院棒球隊の部長に会って学生の親善交流試合に関して協議し、2002年に天津体育学院棒球隊と東海地区大学準硬式野球連盟選抜チームとの親善交流試合を実施した。その当時であっても中国人が野球をしている姿は、このような特別な大学や市・省の代表野球チームでしか見ることができなかった。その当時も中国では週末にグラウンドにて一般大衆が野球どころではなく、キャッチ

ボールをする姿をも見たことがなかった。

しかし、陈显明らの「中国棒球運動史」^{注5)}には中国野球の誕生と発展の詳細が記載されている。その中でも天津での野球の誕生と社会人の天津野球倶楽部の誕生、また、早期に基督教教会学校や南開学校にて盛んに野球が行われ、南開大学に野球部が作られ、その卒業生たちが天津チームを結成して全国大会にも出場して輝かしい成績を収め、中国野球の発展に大きく貢献したことが記載されている。

一方、同時期に天津の租界にてアメリカと日本が野球チームを作って対戦したことや川西玲子が著した「戦前外地の高校野球」^{注6)}には、彼女の父が天津日本商業学校の投手であり、甲子園大会へ2年連続で満州代表として出場したことが記載されている。

現在の日本は、野球が「国技」と言われるまでの野球大国であり、小学校から大学で行われ、社会人でも生涯スポーツとして実施されている。しかし、中国では野球は教育機関でほとんど行われないため、野球人口は極めて少ない。



写真1. 天津体育学院道奇棒球场。^{注4)}



写真2. 天津体育学院道奇棒球场。^{注4)}

* 愛知大学現代中国学部教授

** 愛知大学非常勤講師

*** 天津财经大学珠江学院外语系，讲师

このような日本と中国の野球の普及と発展状況が大きく異なるのが、何故なのかが筆者の極めて大きな疑問である。

この疑問の解明のために両国での野球の始まりとその後の野球の発展状況を調査すべきと考え、早期の同時期に天津にて始まった中国人の天津野球と日本租界の日本人野球の違いに何があって、その後の野球の発展の違いにどう影響したのかを考察してみたい。

本調査研究では、中国天津において始まった中国人と日本人の野球にどのような違いがあり、それがどのように野球の発展の違いに影響して、日中戦争が始まるまで野球競技水準を向上させて拡大普及発展してきたのかを明らかにする。

これらのことを明らかにすることによって1945年終戦直後に両国で野球発展の違いがなぜ起こったのかを検証するための重要有効な不可欠な資料となると考えられよう。

II. 調査方法

中国野球の誕生と発展の歴史が詳細に書かれた著書は、筆者が知る限り陳显明らが書いた「中国棒球运动史」^{注5)}の1点だけであり、論文では同一著者の陳显明が書いた「棒球运动在中国の兴起与早期发展」^{注7)}であり、これらから中国における野球の始まりについて、その概要をまとめた。

天津市における野球の始まりと発展については、「天津通志・体育志」^{注8)}、「中国近现代体育史看天津」^{注9)}、「天津中华基督教青年会与近代天津文明」^{注10)}の著書から概要を要約した。

天津租界地における野球に関しては、「天津通志・体育志」^{注11)}と西村正邦著の「天津租界故事記」^{注12)}、田中良平著の「天津今昔招待席—租界、にんげん模様」^{注13)}、西脇良朋著の「満州・関東州・華北中等学校野球史」^{注14)}からまとめた。

日本租界に創立された天津日本商業学校に関しては、天津日本租界居留民團資料四「共益会事務報告書」の昭和7年～9年^{注15)}^{注16)}^{注17)}から拾い上げて、創立の経緯と教育方針について、

その概要を簡潔にまとめた。また、天津日本商業学校の野球部の創設と野球部の戦績に関しては、西脇良朋著の「満州・関東州・華北中等学校野球史」^{注14)}と川西玲子著の「戦前外地の高校野球」^{注6)}からまとめた。

これらの調査結果に基づいて、天津における中国人と日本人の野球の始まりの違いがその後の野球発展へどのような影響を及ぼしたのか？次に日中戦争勃発直前までの天津における中国人と日本人の野球競技水準と野球競技の拡大普及発展状況がどうであったのか？さらに、1945年終戦直後の中国と日本での野球の復帰とその発展へは、日中戦争開始前の野球が貢献したのか？を考察した。

III. 調査結果

1) 日中における野球の始まり

「最新スポーツ大事典」^{注18)}からアメリカでのベースボールの誕生と発展ならびに(1)日本における野球の始まりに関してその概要を以下のようにまとめた。

ベースボールは、アメリカのニューヨークでアレキサンダー・カートライトが1845年(弘化2年)に社交クラブのニッカーボッカー・クラブでゲームのルールを作った。翌年、ニュージャージー州ホーボーケンで最初のゲームが行われた。その後、1858年(安政5年)には最初の野球協会が誕生し、1861年(文久元年)から勃発した南北戦争によって北軍が南へ進軍するに従いアメリカ南部に野球が広がり、また、鉄道により西部に広がり、1870年(明治3年)までにアメリカ全土に広がった。その翌年の1871年(明治4年)には最初のプロ野球協会が誕生した。

(1) 日本における野球の始まり

1872年(明治5年)にアメリカ人教師のホーレス・ウィルソンが第一大学区第一番中学(のちに開成学校、第一高等学校、東京大学となる)の生徒に野球を教えたのが始まりとされている。

1878年(明治11年)アメリカ留学から帰国

した平岡燾が本格的な野球チームの「新橋アスレチック倶楽部」^{注19)}を結成した。1896年(明治29年)に第一高等学校が横浜外国人チームに勝利し、野球人気が全国的に高まる。続いて早稲田大学、慶応大学等が野球チームを強化し、1899年(明治32年)に日本の中等教育機関が全国的に整備^{注20)}され、野球は中等学校等に組み込まれていく。

その後、1915年(大正4年)に大阪朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会^{注21)}が、大阪豊中球場で始まり、1924年(大正13年)大阪毎日新聞社主催の選抜中等学校野球大会^{注22)}が開始され、のちに両大会が甲子園球場に移され、春夏の甲子園大会(現在の高校野球)となる。

社会人野球は1920年(大正9年)から全国実業団野球大会^{注23)}が大阪で開催され、1925年(大正14年)には東京六大学野球連盟が結成されてリーグ戦が始まった。

さらに、1920年(大正9年)に日本初のプロ野球チームの日本運動協会が結成され、1936年(昭和11年)から日本初のプロ野球リーグの「日本職業野球連盟」^{注24)}が設立された。

なお、1918年(大正7年)に日本独特の軟式野球ボール^{注25)}が考案され、行う野球を広く普及して大きな底辺を作る土台となった。

(2) 中国における野球の始まり

「中国棒球运动史」^{注5)}と「棒球运动在中国的兴起与早期发展」^{注7)}から中国における野球の始まりについて、その概要を以下にまとめた。

1840年のアヘン戦争^{注26)}で負けた中国は、半植民地半封建的国家となり、外国の侵入を防ぎ、中国社会の保守と立ち遅れを早く取り戻すために西洋の産業技術の輸入と富国強兵策の実施のための洋務運動^{注27)}を行い、その一つに留学生の派遣を推進した。中国人留学生が派遣された1873年には、アメリカは誰もが野球をする社会となっており、アメリカの小学校でも大変普及しており、当然中国からの留学生もその野球の虜になった。

中国で野球が初めて行われたのは1895年であり、アメリカへ留学していた学生達が持ち帰

り、その一人であった医者曹泳が無報酬の野球指導者として教会学校の北京滙文書院(1888年創立)で始めた。また、同年にホノルルから一群の華僑学生が帰国し、その中の麦惠安と楊錦魁が同じ年に上海の教会学校である上海セントジョーンズ書院で野球を教えるようになったといわれている。中国における最も早い中国人同士の野球の試合は、1905年6月2日に上海セントジョーンズ書院(1879年創立)と上海の基督教青年会(1900年創立)との試合であり、上海青年会体育場で行われた。また、学校同士の最も早い野球の試合は、1907年(明治40年)に北京滙文書院(1907年創立)と北京通州協和書院(1889年創立)との間で行われた。

アヘン戦争以後、西洋諸国は中国各地に基督教の教堂や教会をつくり、大量の宣教師を派遣した。教会の活動は、宗教事業から“慈善事業”と文化教育事業まで幅広く推進し、多数の教会学校を創立した。また、基督教青年会を発足させた。これらの教会学校と基督教青年会は、中国へ近代体育を輸入する重要なルートとなり、野球もまたこのルートによっても発展した。

このように中国での野球の誕生は、アメリカや日本へ留学して帰国した留学生と帰国華僑によって導入され、外国教会学校と基督教青年会によって中国に次第に普及発展していった。野球は1911年の辛亥革命以前には北京と上海の二、三ヶ所の教会学校だけで発展していたが、それ以後、北京清華、天津の南開と新學書院、上海の滙江と南洋公学の学校で始められ、さらに次第に江蘇、浙江、広東、湖南、湖北、山東省の一部の大都市にて発展した。また、野球を地区の運動会に参入させ、全国運動会と極東運動会の正式種目とした。

2) 中国天津市の中国人野球

(1) 中国天津市の位置と概況^{注28)}

天津市は、中華人民共和国の華北平原海河の五大支流の合流する所に位置し、東に渤海、北に燕山があり、環渤海湾地域の経済的中心地であり、中国北方最大の対外開放港を有する直轄市である。首都北京市とは高速道路や新幹線に

て、0.5～2時間以内で結ばれている。海河が市内を流れ、河口の塘沽に大規模な港湾やコンテナターミナル、工業地帯が形成されている。

天津が開港されたのは、1858年のアロー戦争（第2次アヘン戦争）^{注29}で英仏連合軍に敗北し、天津条約が締結され、1860年の北京条約による。それ以後、北京の外港として急速な発展をしたため19世紀後半から、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、オーストリア、ベルギー、イタリア、ロシア、日本が相次いで租界を設置し、中国で最も租界の数が多い都市となった。

1900年の義和団の乱^{注30}では8カ国連合軍が天津より上陸し、北京を占拠している。中華民国が成立すると1927年に天津市に昇格し、その後の1937年～1945年までの日中戦争では、イタリア租界を除き汪兆銘政権と日本軍により統治された。戦後はアメリカ軍が駐留したものの、1949年に中華人民共和国が成立して天津は直轄市に指定され、工業及び貿易の拠点として発展し、現在に至っている。

現在の人口は998万人、市は16区に分割されており、総面積は11,903,000m²である。2017年には第13回中華人民共和国全国運動会が開催された大都市である。

（2）天津市における野球の始まり

天津市における野球の始まりと発展については、「天津通志・体育志」^{注8}、「中国近現代体育史看天津」^{注9}、「天津中華基督教青年会与近代天津文明」^{注10}の著書からその概要を要約した。

アメリカの教会学校の成美学堂（1923年に天津汇文中学校に改名）を天津に1890年に開校し、アメリカの宣教師と教師が、学生に対して積極的に野球を展開し、学生達は歓迎し、喜んで向かい入れたという。そして武備学堂、電報学堂、北洋大学堂、新学書院、普通中学堂、南開学校（1904年創立）^{注31}などの中等以上の学校の中で広く発展した。

1900年の義和団の乱の数年後（詳細な年の記載はなし）、天津野球倶楽部が華僑によって誕生し、毎週趣味の野球を行ったという。この天津野球倶楽部は、第15歩兵団野球チーム、日本

野球倶楽部、北京海軍陸戦隊野球チーム、北京野球倶楽部との間で試合をして楽しんでいたとの記載がある。

一方、1905年にはすでに南開学校に自分達の野球チームが作られ、南開学校の校長の張伯苓^{注32}は1908年にヨーロッパ各国とアメリカを視察した後、野球運動を積極的に提唱し、数年の発展を経て1911年には、南開学校野球チームのレベルはとて成熟し、技術レベル、身体能力が相当高い水準となり、新学書院、汇文中学校、北洋大学堂のチームと多くの試合をするだけではなく社会人の“華光”チームとなどともよく試合をし、いつも人が注目する成績を挙げていた。

その後、南開学校の卒業生が主力メンバーとなって、新学書院、電報学堂、北洋大学堂などの卒業生からも組織された天津の社会人野球チームは、天津の社会人野球を発展させ、彼らが主力メンバーとなった“北宁”野球チームを天津に作り、華北にて数多くの良い成績を獲得した。

1914年5月に天津チームを主力メンバーとして華北地区代表の“北部チーム”を作り、中国野球史上初めての全国大会である「第二回全国運動会（北京開催）」^{注33}で優勝し、中国野球史上初のチャンピオンとなった。続く「第三回～五回全国運動会」にても、天津チームメンバーが主力や単独にて華北チーム、河北チームを作り参加し、連続3回2位を獲得した。同年、「第二回華北運動会」では野球は公開競技として北京天壇運動場で開催された。

その後、1919年に創立した南開大学（写真3）^{注34}では、候洛荀教授などの野球権威者の



写真3. 1919年（大正8年）創立時の南開大学。^{注34}

表1. 日中戦争以前に天津チームメンバーが主力として参加した大会.

西暦(年)	大会名	開催地	野球競技参加チーム	優勝	備考
1914	第二回華北運動会	北京天壇運動場	公開競技		
1914	第二回全国運動会	北京	華北、華東	華北	
1915	第三回華北運動会	天津南開大学		北京汇文書院	第四回~十回まで野球競技開催なし
1924	第三回全国運動会	武昌	華北、華東	華北	
1925	第二回華北球技運動会	北京清華学校	清華学校、新学書院、南開大学	清華学校	
1926	第一回華東・華北野球地区大会		華東、華北の選抜チーム		
1927	第三回華北球技運動会		南開大学、清華大学		清華大学が参加取り止め野球は中止
1928	第四回華北球技運動会		南開大学、清華大学、燕京大学	燕京大学	第五回~七回まで野球競技開催なし
1930	第四回全国運動会	杭州	天津、上海、湖南、香港	香港	
1931	第十五回華北運動会	済南	北平、華北、遼寧	遼寧	
1932	第十六回華北運動会	開封	北平、華北	華北	
1933	第十七回華北運動会	青島	河北、北平、青島	北平	
1933	第五回全国運動会	南京	河北、湖南、北平、広東、湖北、上海、香港	広東	
1934	第十八回華北運動会	天津南開大学	河北、北平	河北	
1935	第六回全国運動会	上海	広東、湖南、北平、上海、河北	上海	

指導の下に華北球技試合大会において南開大学野球チームは優勝した。さらに、この頃北京に駐留のアメリカ軍チームと対戦して全勝し、これは天津野球史上に残る快挙であった。このように南開大学の卒業生が天津社会人チームの主力メンバーとなってチームが形成されて多くの大会に出場した。主に天津チームが関係した1937年までの大会を年表にして表1に示した。

しかし、1937年7月に北京郊外で起きた盧溝橋事件^{注35)}に端を発し、日中戦争が勃発し、日本軍は南開大学などを爆撃して破壊し、天津は陥落した。この年から終戦まで天津での中国人による野球は完全に途絶えた。

3) 天津租界地における野球

天津租界地における野球に関しては、「天津通志・体育志」^{注11)}と西村正邦著の「天津租界故事記」^{注12)}、田中良平著の「天津今昔招待席 - 租界、にんげん模様」^{注13)}、西脇良朋著の「満州・関東州・華北中等学校野球史」^{注15)}から以下の(1)～(2)の2までをまとめた。

(1) イギリス租界におけるアメリカ軍の野球

アメリカはモンロー主義^{注36)}の建前によってアメリカが獲得した租界はイギリスに委譲し、アメリカ軍はイギリス租界に駐留した。当時アメリカは1898年のアメリカ・スペイン戦争^{注37)}によってスペイン領であったグアム、フィリピン諸島の統治権を獲得した。このためアメリカ

軍は、天津のイギリス租界に駐留し余暇に野球を楽しんだ。

1907年(明治40年)6月に外国人居留地にいるアメリカ人と日本人で第1回野球試合が日本租界にて開催された事が記されている。このような国際野球試合は、アメリカと日本の野球技術レベルを天津人に自分の眼で見させて天津の学生や社会人に野球の魅力を観察させ、天津での野球の発展と啓発に大きな影響をもたらしたようである。

天津日本商業学校4回生の岩下達雄の回想録によると「1917年(大正6年)末、早稲田OBの福永光蔵氏来津するに及び、同氏の優秀なる技量と熱心なる指導下に体育会野球部は俄然面目を改め、従来日本人の技量を蔑視して試合に応じなかった米人チームとも対等の試合を行うようになりました。」^{注38)}と書かれている。それ以降、アメリカ人チームは、海兵隊の『天津マリナーン』、アメリカ市民団の『天津シビリアン』、陸軍15連隊の『アーミー』や海兵隊の『北京マリナーン』などが、日系の『オール天津』と定期的に春と秋の2回、優勝権試合を行い、租界の住民からも人気があったという。

先の岩下が小学生の頃、これらの試合は料金を払い(小学生1ドル)観戦しており、観衆としてのめり込んでいたこと、また、アメリカの応援団は専ら軍人が多く、軍用トラックで乗り付け、必ずといっていいほど座布団、ビール瓶片手に陣取り、ビールを飲みながら英語で奇声

を発し、ヤンキー気質丸出しで応援し、球場内は結構騒がしい雰囲気であったことを記している。

(2) 天津日本租界における野球

1. 天津日本租界の設置

日本は1896年(明治29年)「日清通商航海条約」で上海、天津、漢口、蘇州、杭州、厦門などでの租界開設を認めさせた。天津には1898年(明治31年)から1943年(昭和18年)にかけて日本租界が置かれ、中国にある日本租界の中で最も大きく、約14平方キロメートルの面積を占め日本人と朝鮮人の数も多かった。

当初、獲得した土地の南部の大半は葦の生い茂る無人の沼地であり、最初に干拓作業がなさ

れて、北の海河に近い土地から建設され、日本人が住み始めたのは1900年(明治33年)からで、1902年(明治35年)に在校生14名の日本人私立小学校ができた。

1894年(明治27年)日清戦争開始時に天津在留邦人は48名であったのが、1931年(昭和6年)には1万人となり、その後数年1万人ずつ増加し、1941年(昭和16年)には7万人近くとなった。

図1に1939年(昭和14年)の地図^{注39)}を示した。日本租界は東にフランス租界、北は天津県城(旧城内)、北西部に中国人街三不管(南市スラム街)、南西部に日本軍支那部隊の駐屯する「海光寺」と南は西から東へ流れている運河(現在の南京路)に囲まれている。



図1. 1940年(昭和15年)の天津日本租界地図。^{注39)}

西から東に流れる白河が北にあるが、それに面してオフィス街とメインストリートの旭街周辺に商店街があり、中央付近に駐屯軍司令部、領事館、民団、公会堂、警察、消防署などの官庁がある。学校は、芙蓉小学校、淡路小学校、高等女学校、天津日本商業学校があり、その他には、大和公園、天津神社、稲荷神社、本願寺別院、天理教会、基督教会などもある日本内地の中級都市であった。

2. 日本人社会人野球チームと日系「オール天津」

1909年（明治42年）天津日本租界にて野球同好会が誕生し、日本租界組対紫竹林組（領事館

混成チーム）が対戦したという。翌年にアメリカチームに何度も試合を申し込んだが、少年野球に等しいレベルであったため断られている。

1912年（大正元年）に日本租界の領事館宿舎のある所に野球場（民団グランド）が設置され、1916（大正5年）体育会が創立し、体育会野球部が作られた。翌年の1917年（大正6年）に早稲田大学OBの福永光蔵氏が天津に来て体育会野球部を熱心に指導したことによりアメリカチームと対等の技量となった。また、彼は在留邦人の子弟にも野球を教えて子ども達の技量が向上した。

一方、天津日本尋常高等小学校（芙蓉小学校）の星野校長は特に野球に力を入れ、クラス単位



図2. 1936年（昭和11年）頃の天津日本租界の住吉街グランドの位置。注40) 注47)

でチーム編成し、4年～高等科までを4段階に分け、1学年毎に5点のハンディをつけて総当たり戦を行い、優勝チームに優勝旗を授与、打撃賞も朝礼時全校生徒の前で表彰式を行い、職員室前の廊下に表彰チームと個人の写真を飾る程に盛大に奨励していた。

1918年(大正7年)には、日本の明治大学チームを招待し、その後、毎年慶応大学、早稲田大学、法政大学、大連実業、東京六大学選抜などを招待して活況を呈した。やがて、1923年(大正12年)頃から天津日本チームの技術が向上し、有力選手も加入して天津での野球人気が上昇した。

ついにアメリカ海兵隊(通称：マリーンズ)、アメリカ陸軍(通称：アーミー)、アメリカ倶

楽部(通称：シビリアン)と日本選抜(通称：オール天津)の国際野球リーグが誕生し、春と



写真4. 天津日本租界の住吉街グランドがあった現在地^{注41)}



図3. 天津日本租界の西宮島街グランドの位置^{注42)}

秋の二回リーグ戦を定期開催し、各国租界の野球ファンを熱狂させた。このリーグ戦は1940年（昭和15年）に日本軍が仏印進駐による国際緊張が起こるまで続いた。

天津日本租界において野球をする場所として、1928年（昭和3年）には、淡路街、宮島街、松島街に囲まれた7,300坪にレンガ塀を巡らし、固定観覧席、クラブハウス、トイレを設置したグラウンド（民団淡路街グラウンド）が完成した。しかし、2年後にはこの一部の2,000坪を高等女学校の敷地に当て、天津日本第二小学校と天津日本商業学校建設のために、1936年（昭和11年）に新グラウンドを住吉街に移設した（住吉街グラウンド、図2^{注40)}。このグラウンドの位置は、南の運河（現在の南京路）沿いであり、宮島街と伏見街の延長線上の運河に架かる両橋を越えたところにあった。このグラウンドの現在の位置は、武徳館の対面の南京路と鞍山道の交差点にある写真4^{注41)}の「和平印」の建物のある所であった。このグラウンドは、レンガ造りの固定観覧席があり、内野席は階段板張りシートで屋根はアンペラ張り、一・三塁側にダッグアウトとトイレが設置された。なお、このグラウンドは冬場にはスケート場に変身したという。ここでは、天津日本租界のチームが練習し、試合をするのはもちろん天津日本商業学校の野球部の練習場所でもあった。また、天津日本商業学校の日本チーム以外の日本本土から遠征してきたチームもここで試合をした。

その後、この住吉街グラウンドは、その場所に民家を作るためにグラウンドは新たな場所に移転（西宮島街グラウンド、図3^{注42)}した。その場所は、以前の住吉街グラウンドの運河を越えた橋向こうの宮島街と浪花街の間に天津日本商業学校があったが、その両道路の中間地点に運河からの道が作られ、その道端から以前のグラウンド分を南に下がった位置の西側に作られた（現在の天津医科大学総合病院の辺り、写真5^{注43)}と写真6^{注44)}。

現在の位置は、南京路を北端とし、南北へ走る四平西道とその道から東へ走る西宇道の交差点辺りの西側にあった。この両グラウンドの現在

の位置を写真7^{注45)}に示した。

さらに、1940（昭和15年）に団立陸上競技場



写真5. 天津日本租界の西宮島街グラウンドがあった現在地（天津医科大学総合病院）^{注43)}



写真6. 天津日本租界の西宮島街グラウンドがあった現在地^{注44)}



写真7. 天津日本租界の両グラウンドがあった現在地（天津中心唐拉雅秀酒店から筆者撮影、写真内の青囲みが住吉街グラウンド、赤囲みが西宮島街グラウンド）^{注45)}

が六里台に完成し、以降野球もそちらで実施された。

1937年（昭和12年）から京津日日新聞が天津日本人チームのトーナメント戦の主催者となり、マスメディアが新聞紙面を飾るスポーツ大会として世論を盛り上げ、各チームとゲームの充実に影響を及ぼし、大きく貢献した。

毎年5月に天津日本人は野球で熱くなるが、さらにヒートアップしたのは1938年（昭和13年）であり、天津日本商業学校野球部が第二十五回大会に満州代表として甲子園初出場を果たし、さらに翌年も連続出場の快挙を果たした。このため天津日本人チームの野球試合も加熱し、5月から6月にかけて行われるトーナメント戦は日本租界最大のイベントとして全居留民を熱狂させる季節行事となった。

1939年（昭和14年）天津日本野球連盟が結成され、天津での野球公式試合の実施運営母体となり、この年のトーナメント戦には12チームが参加するまでに発展し、なお、その大会への出場全選手から天津実業団（オール天津）が選出され、内地遠征や対外試合へ出場できるという褒美が与えられるため選手全員のやる気を高める動機づけとなっていた。

天津実業団（オール天津）が、アメリカチームと対戦していた時には、優秀な人材も豊富となり、早稲田大学の堀田、福永、慶応の浜崎信二などがおり、浜崎は戦後にプロ野球の巨人ヘッドコーチと阪急ブレーブスの監督を務めた。また、天津育ちの野球人としては、芙蓉小学校を卒業した藤田兄弟がおり、弟の省三は法政大学卒業後、母校法政大学の監督として活躍し、東京六大学を1940年と1941年に連覇し、六大学選抜チームの監督に就任し、天津に遠征して天津実業団（オール天津）と天津鉄路局と対戦した。天津チームは善戦するも敗れ、六大学選抜チームのすごさを見せつけた。この時の六大学選抜チームには、慶応の別当、白木、早稲田の辻井、法政の袖木、森下、加賀谷など戦後のプロ野球の名選手が揃っており、試合には天津在住の日本人のほとんどが観戦に駆けつけて一球一打に歓喜したようである。

3. 天津日本商業学校の野球

日本租界に創立された天津日本商業学校に関しては、天津日本租界居留民團資料四「共益会事務報告書」の昭和7年～9年^{注15)}^{注16)}^{注17)}から拾い上げて、創立の経緯と教育方針について、その概要を以下の①と②に簡潔にまとめた。

①天津日本商業学校の創立

天津の日本租界の男子に商業を学ばせ、商業従事者を育成するための男子中等学校を設立することは、在留邦人の多年の要望であったことから1928年（昭和3年）9月居留民会臨時会に於いて、天皇陛下御大典記念事業として男子中等学校設立を決定して翌年度より基金の積立を始めた。

1932年（昭和7年）10月11日天津日本商業学校設立認可申請を文部省に行い、同年10月14日その認可を得た。その後、翌年2月15日に天津高等女学校教諭として着任していた若菜佐氏を商業学校の校長に任命し、開校諸準備を行い、同年3月22日に入学試験を行い、39名の合格者を決定した。

このように天津日本商業学校（以下天商と称す）は天津日本人居留民團の財団法人共益会が経営する文部省認定の外甲種5ヶ年商業学校として、1933年（昭和8年）に創立した。同年4月1日に公会堂にて開校式を挙行し、4月4日に芙蓉街青年会館を仮校舎とし、4月4日に始業式を行い授業が開始された。

1934年（昭和9年）12月15日に芙蓉街旧共立医院跡に仮校舎を移転し、1936年（昭和11年）3月に新校舎竣工と共に第二小学校隣の淡路街と宮島街に囲まれた地に移転した（図2^{注46)}）。当時と現在の校舎（写真8^{注47)}）と南京路側からみた現在の校舎を写真9^{注48)}）に示した。

1939年（昭和14年）の天商の当時の状況は、教職員は若菜佐氏が校長兼教諭であり、教諭が12名、嘱託職員9名、書記1名、配属将校1名であった。生徒数は221名、学級編成は3年～5年は各1学級（30名～36名）1年（60名）と2年（64名）は各2学級であった。また、校舎と運動場面積は、校地面積が9619.5m²、建物面



写真8. 天津商業学校の創立当時と現在の校舎。^{注48)}



写真9. 南京路側からみた天津商業学校の現在の校舎。^{注49)}

積が1930.5m²、建物延面積が5742.0m²、屋外運動場面積（天津第二日本尋常小学校と兼用）が17084.1m²であった。

②天商の教育方針

天商の教育目的は、商業従事に関する知識技能を身に付けて徳性の涵養に努める人材として育成し、実業社会に就いて活動するのに適した人材を養成することである。このために徳、智、

体を涵養、啓発、鍛錬を図ることはもちろんであり、特に徳育を重んじて「徳性の涵養、人格の養成」を象徴とする。この象徴の下に自治自学に努め知識の進歩を計るとともに体育を奨励し剛健なる気性を求めている。天商はこの天津の地にて海外第一線に於いて活躍する者を養成するためには一層体育に留意し、「先ず健康」の標語の下に体育を奨励して身心の鍛錬を図る必要がある。

また、天商の体育方針は、体育目標を間違っではならないとあり、体育は適度な運動を通じて人格の統治を図る一方法であること。このため体育運動の指導では、生徒の心身の発達に適合する科学的、合理的方法により正しく実施し、生徒身体の修練と共に運動精神を発揚し、徳性を涵養することに努めることを目標としている。

さらに、天商設立当初から課外での体育運動活動として学友会体育部を設置しており、剣道、柔道、野球、庭球、卓球、陸上競技、バスケットボール、アイスホッケー、トレーニングの各部を設けて、全校生徒は必ずそのいずれかに所属して体育運動の日常的实施をさせている。

このように天商は設立時から海外の天津を中心とした第一線で活躍できる心身共に健康で十分な徳性と人格を兼備した男性商業従事者を養成するために作られた学校であり、そのためにも体育が特に教育上重視されていた。

③天商野球部の創設と活躍

天商の野球部の創設と野球部の戦績に関しては、西脇良朋著の「満州・関東州・華北中等学校野球史」^{注14)}と川西玲子著の「戦前外地の高校野球」^{注6)}から以下の③のA～Cと④のA～Eにまとめた。

A. 天商野球部の創設

天商硬式野球部の初代の主将を務めた柴原の回想録から、1933年（昭和8年）天商創立入学時から3年生までは野球は軟式野球であったが、多くの生徒が野球をやっており、休みの日には先生を交えて練習試合をしたという。1936

年（昭和11年）、4年生になって硬式野球部が誕生し、柴原が主将を務め指導は往年の早稲田名選手の堀田正氏であったという。

1936年（昭和11年）3月に淡路街、宮島街角の第二小学校隣に新校舎を竣工して移転した。その秋に硬式野球部が創設され、岡田純一教諭が部長を、往年早稲田の名外野手として全国に名を馳せた堀田正氏が監督を担当した。

野球部結成以来半年後に部員は12名（5年5名、4年2名、3年3名、2年2名）となり、堀田監督の下で猛練習を行ない、京津日日新聞主催の全天津野球大会に出場し、1勝2敗であり、また、天津邦人野球大会では、団友・若葉・青年会・裕豊の強いチームと互角に戦える力をつけていた。

天商野球部の目標とする大会は、日本本土

で8月に開催される甲子園大会であり、即ち第23回全国中等学校優勝野球大会への出場であった。そのためには満州代表の座を勝ち取る必要があり、第17回満州予選大会で優勝しなければならない。

B. 満州予選大会

全国中等学校優勝野球大会へ出場するための満州予選大会は、1921年（大正10年）から始まり、1941年（昭和16年）まで毎年行われた。従って第7回全国中等学校優勝野球大会から第27回大会までの21回連続で甲子園へ満州代表を送った。

当時の満州にあった中等学校の所在地と数を表2^{注49)}に示した。旅順市に1校、大連市に7校、奉天市に3校、安東市に1校、新京特別市に3校、鞍山市に1校、撫順市に2校、哈爾濱市に

表2. 当時（昭和12年～14年頃）の満州にあった中等学校。^{注49)}

校名	所在地	設立年月	設立者	種数	生徒数	調査年月
旅順中学	旅順市大迫町	明42. 5	閩東州庁	1 6	738	昭14. 7
大連一中	大連市博文町	大 7. 4	"	2 5	1,245	"
大連二中	大連市水仙町	大13. 4	"	2 5	1,290	"
大連三中	大連市早苗町	昭13. 4	"	8	390	"
大連中学	大連市下藤町	昭 9. 4	大連市	2 0	1,009	"
大連商業	大連市西山屯	明43. 9	朝鮮總督府	2 0	1,067	"
大連実業	大連市	大 9. 8	大連市	1 4	640	"
大連工業	大連市朝日町	昭10. 4	閩東州庁	2 0	570	"
奉天一中	奉天市大和区新高町	大 8. 4	満鉄	2 0	984	昭12. 4
奉天二中	奉天市	昭11. 4	"	8	421	"
奉天商業	奉天市大和区萩町	昭 8. 4	東洋協会	9	312	昭13. 4
安東中学	安東市旭日区北三条通	大14. 1	"	1 0	428	昭12. 4
新京一中	新京特別市	昭 8. 4	"	1 7	881	"
新京二中	新京特別市	昭14. 4	"			
新京商業	新京特別市常盤町	大 9. 3	満鉄	1 4	703	昭13. 4
鞍山中学	鞍山市	大12. 1	"	1 0	447	昭12. 4
撫順中学	撫順市	大12. 1	"	1 3	496	"
撫順工業	撫順市	昭11. 2	"	1 2	178	昭13. 4
公主嶺農		昭11. 2	"	2	89	"
哈爾濱中	哈爾濱市					昭12. 4
天津商業	天津日本租界淡路街	昭 8. 4	朝鮮総督府	7	221	昭12. 3
青島中学	青島日本租界	大 6. 4				

1校、天津日本租界に1校、青島日本租界に1校、所在不明地に1校の計22校あった。しかし、1921年（大正10年）～1937年（昭和12年）までの満州予選会出場校は、毎年2校から5校だけであった。

21回の満州予選会へ出場歴があるのは、大連商業14回、奉天中学11回、青島中学10回、新京商業7回、安東中学6回、奉天商業6回、天商5回、南満工業4回、撫順中学3回、旅順中学2回、の計10校^{註50)}だけであった。

満州予選会での優勝回数は、大連商業12回、青島中学4回、天商3回、奉天商業1回、南満工業1回であった。

C. 満州代表の全国中等学校優勝野球大会での戦績

満州代表の全国中等学校優勝野球大会での戦績は、大連商業が1921年（大10年）に準決勝進出でベスト4、同じく大連商業が1924年（大正13年）と1925年（大正14年）に準決勝進出しベスト4、翌年の1925年（大正15年）について決勝進出するも惜しくも静岡中学に1対2で敗退し、準優勝が最高の成績であった。これ以外の大会では、1回戦か2回戦で敗退していた。

このように1925年（大正15）年の大会の成績をピークに衰退の一途を辿ってきた。一時期輝かしい成績を挙げて黄金時代を築いた大連商業も1934年（昭和9年）で野球部が解散となった。それよりも早い時期に旅順中学、南満工業、撫順中学の野球部が解散し、1935年（昭和10年）にまだ残っていた中学は青島中学、安東中学、奉天商業、新京商業、奉天中学の5校であったが、大会後に奉天中学が、1936年（昭和11年）の大会後に安東中学が次々と野球部を解散して3校のみとなった。このため近くに対戦相手がいなくて試合ができず、実戦なしでのものっぽり練習のみであり、強くなれず、不振の一途を辿っていた。

④天商野球部の成績

A. 第17回満州予選大会での天商の戦績

天商が野球部創設約半年で初めて出場した大

会は、1937年（昭和12年）の第17回満州予選大会であった。この予選大会には当初、安東中学、青島中学、天商の3校が出場されることが予定されていたが、安東中学が大会直前に参加を取り消し2校だけでの大会となった。

大会1ヶ月前の岡崎教諭は「当地では試合をする相手校がない事が非常に淋しいのですが、土地柄先般の邦人野球大会に出場、試合度胸とでもいうべきものを幾分体得したものです。昨秋結成されたばかりの若輩で、技術の点試合馴れの点では甚だ未熟ですが、天津ッ子の意気と熱で全力を以て戦えば決して恥じる事はないと思います。予選会までまだ1ヶ月あるので十分練習を行うつもりです。」^{註51)}と話しており、実戦経験は不足しているが、十分に戦えるチームであると語っていた。

一方、堀田監督は「甲子園出場の子生チームのコーチは12、3年前から内地でやっていますが、それらに比較して当チームは技術的に大差ない様に思います。ずば抜けて素質の優れた選手はいません。反面どれと云って欠点のある選手もなく纏まっています。野球部創立後、半年しか練習していないのですが、選手が素直で、熱烈な意気で精神的・技術的に一步一步向上してゆくのは試合の勝負を度外視しても喜ばしい事と思います。」^{註52)}と話しており、甲子園出場チームとさほど差がなく纏まっており、選手の熱烈な意欲による向上が狙えるチームであると述べていた。

本大会の試合結果は、1回戦の天商対青島中学は7月25日大連実業球場において行われ、12対13で青島中学が勝利を得た。互いに4安打であったが、四死球が天商26個、青島中学17個と投手のコントロールが定まらない大乱戦であった。

2回戦は、26日大連実業球場で行われ、天商が10対8で勝った。3回まで3点リードの天商が4回表に同点、裏に4点追加したが、6回に同点とされたが、7回裏に3点追加し試合を決めた。この試合は打撃戦であったが、四死球は青島中9個、天商10個であり、両チームの投手のコントロールのなさが得点に繋がっていた。

決勝戦は27日大連実業球場で行われ、青島中学が13対3で勝ち優勝を決めた。5回までシーソーゲームであったが、天商の金投手が疲れ6回と7回で8安打打たれ9点取られて試合は決まった。

天商1回生の柴原正憲氏の「野球部大連遠征記（昭和12年）」^{注53)}からは、租界愛球家各位のご声援、堀田氏を始め、全天津の絶大なるご援助の下に天商創立以来の第1回の大連遠征であり、7月14日に東站にて在校生の万歳の声に見送られ汽車にて塘沽へ、天津丸にて航海し翌朝大連へ到着した。到着後すぐに純白のユニフォーム姿で大連神社に参拝し猛練習に励んで試合の日を迎えたこと。1回戦に敗退して、負けてどうして帰れようとの思い、2回戦に勝ち嬉しく、決勝戦を迎えたが敗退し、残念でたまらない気持ちが綴られ、どんな顔して帰れば良いのか不安な様子が伺える。また、ラジオで天津の様（天津事変）が報道され、在校生が軍に献身的な努力をしていることを聞いて、「我らが帰ったら諸君らに代わって大いに働こう。それがせめてもの諸君等への酬いだ」^{注54)}と語っている。

B. 第18回満州予選大会と第24回全国中学校優勝野球大会への出場戦績

1938年（昭和13年）の満州予選大会は、天商と奉天商業の2校だけの参加となり、1回戦は7月23日に大連実業球場にて行われ、川西投手が奉天商業打線を2安打完封し、天商打線は7安打7得点で勝った。翌日、2回戦が行われ、川西投手が2安打1得点に抑え、天商打線は5安打6四死球に10盗塁を絡めて10点を挙げて圧勝して優勝を決めた。

天商は満州予選大会への2度目の出場で満州代表の座を勝ち取り、岡崎部長、堀田監督、松田コーチと選手14名が8月2日天津駅で多くの人々に見送られ列車にて出発し、塘沽から長城丸にて丸4日間かけて6日に神戸へ到着した。天商野球部は丸長旅館に宿泊し、第24回全国中学校優勝野球大会が開幕する13日まで仁川商業戦に備えて練習に励んだ。

1回戦は8月14日朝鮮代表の仁川商業と対戦し、エース川西投手の制球が大乱調にて14四死球を与えるも得点を許さず、両チームとも6安打にて互角の戦いとなったが、野選と暴投により失点したことにより、2対3で惜しくも敗退した。

C. 第19回満州予選大会と第25回全国中学校優勝野球大会への出場戦績

1939年（昭和14年）の満州予選大会は7月31日から奉天満俱球場にて新京商業、青島中学、奉天商業、天商の4校が参加して開始した。

1回戦は天商対新京商業であり、天商の一方的な試合となり、18対3で天商が危なげなく勝った。次の、奉天商業対青島中学は、3時間余りの乱打戦となり、18対14で奉天商業が勝った。

決勝は翌日、天商対奉天商業となり、先行の天商は初回11点の大量得点に追加点を加え、投げてはエース川西が奉天商業打線を2安打、3四死球、1敵失にて完封し、16対0にて優勝を決めた。

優勝した天商は8月3日に奉天を出発し、甲子園へ向かい7日朝に神戸へ到着し、13日の開会式まで厳しい練習に励んで第25回全国中学校優勝野球大会へ備えた。

1回戦の相手は地元の関西学院となり、14日に対戦した。前半は両チームとも初回から得点を挙げ競り合ったが、中盤から天商の川西、渡辺両投手の乱調と9失策により、22対8と大差にて天商は敗退した。

D. 第20回満州予選大会

1940年（昭和15年）の満州予選大会は7月20日と21日の両日奉天満俱球場にて新京商業、奉天商業、天商の3校が参加して行われた。

1回戦の奉天商業対新京商業は、5対1で奉天商業が勝ち、決勝戦となる奉天商業対天商は21日に行われ、2対2の同点で迎えた9回裏に天商の失策によって3対2で奉天商業がサヨナラ勝ちを納め優勝を決めた。第26回全国中学校優勝野球大会へは奉天商業が出場した。

E. 第21回満州予選大会

1941年（昭和16年）の満州予選大会は、7月17日～19日に奉天満俱球場にて天商、奉天商業、新京商業の3校が参加して行われた。初戦の天商対奉天商業は、天商が僅か2安打ながら奉天商業の失策によって3対0で勝った。翌日、奉天商業対新京商業の試合が行われ、9対6で新京商業が勝ちを得た。

決勝は天商対新京商業の対戦となり、天商1安打、新京商業4安打であったが、新京商業が6失策にて自滅して7対4にて天商が優勝を決め、第27回全国中等学校優勝野球大会への満州代表の座を獲得した。しかし、この年に入ってから戦局が深刻化していたものの、全国中等学校野球優勝大会は実施の方向で予選大会を行っていたが、7月に文部省通達によりスポーツの全国的な催しは禁止が出され、中等野球も禁止となり、1945年（昭和20年）の敗戦まで5年間中止となった。

この時の全国大会に出場できない無念さについては、天商7回生の森口仁氏の回想録からは「しかしながら誠に無念な事は、折角予選に優勝し、歓迎があるものと思ひ天津駅に帰着すると駅頭の歓迎はなく、待っていたのは第27回の夏の大会が県外試合の中止、文部省令によって遠征不可となり、開催できなくなったという事で連絡が入り、無念の涙を流したのを覚えています。」^{注55)}とある。また、天商8回生の原口鉄雄の回想録からも「昭和16年に新京商業戦に勝って満州予選で優勝、甲子園に行けると胸膨らませ、悠々と天津駅に凱旋、駅頭にて甲子園大会中止の報、未だにその悔しさを忘れる事は出来ません。」^{注56)}と無念さが述べられている。

IV. 考察

1) 日中における野球の始まりの違いとその後の普及発展の違い

表3に天津の中国人と日本人の野球の始まりと戦前の野球発展小史を示した。日本には1872年（明治5年）に野球がアメリカ人教師により中学の生徒に紹介され、その6年後にアメリカ留学から帰国した平岡が野球倶楽部を結成して

本格的に野球を日本人学生達に教え、野球競技水準を徐々に向上させて、18年後に一高が横浜外国人チームに勝利するという日本中を大きく沸騰させる成果を得て、野球人気を全国的に高めた。

翌年に中等教育機関が全国的に整備され、野球が中等学校に取り組みられていくこととなり、1912年（明治44年）までに全国の約200校の中等学校に野球部が設立され、中等学校による全国的な野球の普及に繋がり、さらに、1915年（大正4年）に全国中等学校野球大会が大阪朝日新聞社主催の下に始まり、次第に予選参加校数の増大と多くの野球ファンを形成していくこととなった。そして中等学校にて活躍した選手達が大学、社会人となって野球を継続していき、さらにはプロ野球への道が作られていった。

このように日本に野球が紹介されて、全国に広く普及発展しプロ野球リーグが始まるまでには64年間の歳月を要した。

一方、中国に野球を初めて紹介したのは、アメリカへ留学していた中国人留学生が1895年（明治28年）到北京の教会学校の生徒達に教えている。それから10年後に中国人同士の野球の試合が上海で始まり、学校同士の試合が北京でその2年後に始まったという。

1911年以前はアメリカや日本へ留学して帰国した留学生と帰国華僑によって北京と上海の外国教会学校と基督教青年会などの数校にて普及されていたが、その後、野球が各地の大都市で紹介され、中国の学校にて次第に普及発展していったようであるが、その詳細を十分に証明する資料是北京、上海、天津以外は「中国棒球運動史」にも記載がなく不明である。

このように中国への野球の初めての紹介は、日本に23年間遅れて始まった。この23年間の差は極めて大きく、中国で野球が紹介された時には、日本では一高が横浜外国人チームに勝利し、すでに日本では全国的に野球が注目を浴びる時代となっており、中国で初めて学校同士の野球が行われた1907年（明治40年）には、すでに日本では全国の多くの中等学校に野球が取り込まれて盛んにおこなわれている時期であった。中

国では1920年代から1930年代にかけて全国的に江蘇、浙江、広東、湖南、湖北、山東省の一部の大都市にて発展した。大学等の学校にて野球が行われるようになったものの、北京、上海、

天津も含めても1都市数校としても9都市では非常に限られた大学だけで実施されており、日本のような中等学校を始めとする学校による全国的な拡大普及発展はみられていない。

表3. 中国と天津の中国人および日本と天津日本租界の日本人における野球の始まりと戦前と戦後復活の野球発展小史.^{注59)}

西暦		中国と天津の中国人野球	西暦	年号	日本と天津日本租界での日本人野球
			1872	明治5	アメリカ人教師のホーレス・ウィルソンが第一大学区第一番中学の生徒に野球を紹介した。
1895	光緒20	北京滙文書院と上海セントジョーンズ書院でアメリカ帰りの留学生と華僑留学生が野球を紹介した。			
			1898	明治31	天津に日本租界が設置。
1905	光緒30	上海セントジョーンズ書院と上海の基督教青年会が野球の試合をした。天津の南開学校に野球チームが作られた。			
1907	光緒32	北京滙文書院と北京通州協和書院との間で学校同士の初めての野球試合をした。天津の華僑が集まり、天津野球倶楽部を結成し、第15歩兵団野球チーム、日本野球倶楽部、北京海軍陸戦隊野球チーム、北京野球倶楽部との間で毎年試合を行った。	1907	明治40	外国人居留地のアメリカ人と日本人で第1回野球試合が行われた。
			1909	明治42	天津日本租界に野球同好会が誕生し、日本租界組対紫竹林組（領事館混成チーム）が試合をした。
1911	宣統2	天津の南開学校チームは新学書院、文中学校、北洋大学堂と試合をした。南開学校野球チームの競技レベルが向上し、天津の社会人の華光チームと試合をした。			
			1912	大正元	日本租界の領事館宿舎のある所に野球場設置（民団グラウンド）。
1914	中華民国3	南開学校の卒業生が主力メンバーとなり、華北地区代表の北部チームを結成し、第二回全国運動会で優勝（中国野球史上初）した。			
1915	中華民国4	南開学校が第三回華北運動会に参加。			
			1916	大正5	体育会が創立し、体育会野球部が作られた。
			1917	大正6	早稲田大学OBの福永光蔵氏が来津し、体育会野球部を指導し、在留邦人の子弟にも野球を指導。
			1918	大正7	日本の明治大学チームを招待。
1919	中華民国8	南開大学が創立し、野球権威者の候洛荀教授の指導の下に野球競技レベルが向上。			
			1923	大正12	アメリカ海兵隊（マリーンズ）、アメリカ陸軍（アーミー）、アメリカ倶楽部（シビリアン）と日本選抜（オール天津）の国際野球リーグが誕生。春と秋にリーグ戦を定期開催。
1924	中華民国13	南開学校の卒業生が主力メンバーとなった天津チームにて、華北地区代表のチームを結成し、第三回全国運動会で優勝。			
			1928	昭和3	野球試合のできるグラウンドが淡路街、宮島街、松島街に囲まれた地に完成（民団淡路街グラウンド）。天津尋常高等小学校にて校内学年対抗野球リーグ戦が始まる。
1931	中華民国20	天津チームを主力とした河北チームが第十五回華北運動会にて優勝。			

西暦		中国と天津の中国人野球	西暦	年号	日本と天津日本租界での日本人野球
1932	中華民国21	天津チームを主力とした河北チームが第十六回華北運動会にて優勝。			
			1933	昭和8	天津日本商業学校創立。
1934	中華民国23	天津チームを主力とした河北チームが第十八回華北運動会にて優勝。			
1936	中華民国25	天津体育協会第4次執行委員会が男子野球競技の実施を決定。	1936	昭和11	天津日本商業学校と天津日本第二小学校建設のために新グラウンドを住吉街へ移設(住吉街グラウンド)。硬式野球部が創設され、堀田正氏がコーチ就任。
			1937	昭和12	京津日日新聞が天津日本人チームのトーナメント戦の主催者となる。天津日本商業学校野球部もトーナメント戦へ参加。天津日本商業学校が第17回満州予選大会決勝へ進出するも敗退。
			1938	昭和13	天津日本商業学校が第18回満州予選大会を優勝し、第24回全国中等学校野球大会に満州代表として甲子園初出場。大連実業団を招待し、天津実業団、天津マリーンズと対戦。
			1939	昭和14	住吉街グラウンドに住宅建設のため西宮島街へグラウンド移転(西宮島街グラウンド)。天津日本野球連盟が結成し、運営母体となりトーナメント戦に12チームが参加。その中から天津実業団(オール天津)が選出され、内地遠征や対外試合に参加。天津日本商業学校が第19回満州予選大会を優勝し、第25回全国中等学校野球大会に満州代表として甲子園連続出場。東京六大学選抜チームが来津、オール天津と対戦しオール天津楽敗。第1回民団各部対抗野球試合が開催される。
			1940	昭和15	第20回満州予選大会で天津日本商業学校敗退。団立陸上競技場が六里台に完成し、野球もそこで実施。
			1941	昭和16	第21回満州予選大会で天津日本商業学校優勝。第27回全国中等学校野球大会は戦争のため中止。都市対抗野球北支予選会で天津実業団が優勝し、全国都市対抗野球支那代表決定戦へ出場。興亜精神昂揚野球大会が64チームが参加し開催され国際運輸が優勝した。戦争激化により全国中等学校野球大会中止。
			1942	昭和17	健民軟式野球交歓大会、居留邦人軟式野球大会、京津対抗軟式野球大会が開催される。
			1943	昭和18	大学生野球中止。
			1944	昭和19	プロ野球一時休止。
			1945	昭和20	11月18日神宮で全早稲田対全慶応戦を举行。11月23日プロ野球が東西対抗戦を実施。
			1946	昭和21	大学生野球、社会人野球、プロ野球が復活。第28回全国中等学校野球大会が実施される。
1947	中華民国36	台湾電力公司、台湾石炭公司、台中糖歴等の職員野球チームと上海沪星野球チーム(上海復旦大学野球チームと上海熊猫野球チームの合同チーム)が上海で親善交流試合をした。			
1948	中華民国37	第7回全国運動会にて野球は公開競技として上海、台湾、広東、空軍の4チームが参加して実施。			
1952		天津市野球協会が成立。天津の中学生を中心とした「北斗星」チームが結成される。			

2) 日中戦争勃発直前までに起きた天津の中国人と日本人の野球競技水準の向上と野球競技の拡大普及発展状況

天津における中国人の野球は、アメリカの教会学校である成美学堂が1890年（明治23年）に開校されてアメリカの宣教師と教師によって紹介されたのが初めてである（詳細な開始年は不明）。1900年の義和団の乱の数年後に華僑によって趣味のために作られた天津野球倶楽部が、駐留していたアメリカ軍や天津租界の日本人の野球倶楽部などと試合を楽しんでいた。

その後、数校の中等以上の学校の中で広く発展し、1905年（明治38年）には、南開学校に野球チームが作られ、強化されて野球競技水準を向上させて、天津の社会人の華光チームとも対等にゲームをしている。

その後、南開学校の卒業生が主力メンバーとなり、他の学校の卒業生と一緒に組織された天津の社会人チームの北宁チームは、華北地区において良い成績を上げて活躍した。さらに、天津チームを主力メンバーとして華北代表チームとなった北部チームは、1914年（大正3年）に第二回全国運動会にて中国野球史上初優勝に輝き、第三回～第五回全国運動会にても連続三回2位を獲得した。

1919年に南開学校は南開大学となり、野球権威者である侯洛荀教授の野球指導の下に華北球技試合大会において優勝し、また、北京に駐留のアメリカ軍チームと対戦し全勝し、天津野球史上に残る快挙を遂げた。その後も1937年まで南開大学の卒業生が中心となって天津社会人チームの主力メンバーとして数々の大会で優秀な成績を収めた。

このように天津における野球は南開学校と南開大学によって発展し、その卒業生が中心メンバーとなって作られた天津チームの活躍によって天津の野球競技水準の発展がなされた。しかし、それによって天津の多くの学校に野球が普及したり、発展することには繋がっていなかった。

一方、日本租界では1907年（明治40年）にイギリス租界に駐留しているアメリカ人と第1回

野球試合をやったのが始まりであり、その後、野球競技水準が向上して拡大普及発展を遂げる。その理由として以下のことがあげられよう。

- ①1916年（大正6年）に体育会が創立して体育会野球部が作られ、翌年に早稲田大学OBの福永氏が来て体育会野球部と在留邦人の子弟にも野球を熱心に指導したことにより、これまで相手にされなかったアメリカ軍隊チームや市民チームと定期戦をやるまでに野球競技水準が向上したこと。
- ②日本から東京六大学チームや大連から大連実業団チームを招待して対戦し、日本から就職にて来た野球選手経験豊富な有力選手も加入して天津での野球は、野球競技水準が上昇して人気が上がったこと。
- ③小学生の子供達にも芙蓉小学校の星野校長が特にクラス・学年単位の野球対抗戦を実施して表彰するまでに奨励したことが小学生野球の行う・観るの動機付けとなったこと。
- ④1937年には京津日日新聞が社会人チームのトーナメント戦の主催者として天津の野球をリードして報道して日本租界を大きく盛り上げたこと。
- ⑤早稲田野球部OBの堀田監督の熱心な指導の下に血のにじむような猛練習を重ねて、翌年から天商野球部が2年連続満州予選大会で優勝し、甲子園連続出場を果たしたこと。
- ⑥グラウンドに野球をやれるフェンスと応援できる固定観覧席や内野席には階段板張りシートを作り、観る野球・応援する野球に対応したこと。

このように天津日本租界での野球は、日本から野球経験豊富な選手であった優秀なコーチや有能な選手を呼び寄せて日本租界のチームにおける指導者や選手として迎え入れることにより、野球競技水準の向上を適確に図り、十分にその成果によって野球競技水準の向上が得られたこと。また、野球競技を子供の時から小学生に奨励して野球の行う・観るの動機付けとして野球の楽しさを教えたこと。さらには、新聞社による野球報道による世論の盛り上げによる選手への動機付け、野球をやれる・観るグラウンド

作りによる野球ファン獲得の成果によって天津日本租界の野球競技の拡大普及発展に大きく貢献したものと考えられた。

3) 1945年終戦直後の中国と日本での野球の復帰とその発展へは、日中戦争開始前の野球が貢献したのか？

1937年天津に日本軍が侵攻し、南開大学を爆破して破壊し、天津は陥落した。この年から天津の中国人の野球は途絶えた。終戦後1948年に全国運動会が行われたが、天津チームが所属する華北も河北も参加しておらず、天津での野球は1952年に天津市野球協会が成立して再開された。この日中戦争によって天津での野球は15年間もの長い間中止されたのである。

天津の日本租界では1942年まで野球が行われており、1943年から中止なり、敗戦後に日本租界で野球が行われた記録はなかった。

日本国内では1941年に中等学校野球が、1943年に大学生野球が、1944年にプロ野球が各々中止となった。しかし、1945年8月15日の敗戦後、その年の11月18日に神宮で全早稲田対全慶応戦が行われ、11月23日にプロ野球が東西対抗戦を実施した。そして翌年の1946年には、大学生野球、社会人野球、プロ野球が復活し、第28回全国中等学校野球大会が開催された。

中国国内では、上海で1947年に上海复旦大学と上海熊貓チームの合同チームが上海へ台湾の社会人チームを招き親善交流試合を実施した。翌年の1948年には第7回全国運動会にて野球が公開競技として行われたが、全国から参加したのは4チームのみであった。このように戦後、中国国内ではすぐに野球が再開されたのは極一部の地域だけであり、日本国内での青少年からプロ野球までの幅広い年齢層で全国的な野球の復活を遂げたのとは、全く異なっていた。

このように日中戦争により天津では15年間も野球が行われていなかったことは、その野球競技水準の低下が激しく起きたものと想像でき、天津における野球の拡大普及発展に大変大きなマイナスの影響を与えたものと推察される。当時の天津にて、南開大学や他の学校にて野球を

行っていた若者達は15年間もの間、野球をすることができず、その間に野球のための身体能力の低下や野球技術の低下が起きたであろうことは十分に考えられる。この日中戦争による天津における中国人の15年間の野球中止は、天津野球に甚大な被害となり、天津の中国人による野球は戦後に完全にリセットされてしまい初歩から再スタートされたものと考えられた。

V. 結論

中国への野球の初めての紹介は、日本に23年間遅れて始まっており、その差はその後の野球の普及とその拡大発展に大きな影響があった。また、日本では学制改革により中等学校に野球が組み込まれていき大きな野球の拡大発展に繋がったが、中国では全国的に一部の大都市にて発展して大学等の学校にて野球が行われるようになったものの、非常に限られた数校だけで実施されており、日本のような中等学校を始めとする学校による全国的な拡大普及発展はみられていなかった。

この両国の拡大普及発展の違いの根底には、大学で野球を学んだ学生が、その後に中等学校の教員としてあるいは野球指導者として赴任して、さらに広めて野球技術の向上に貢献したかどうかの違いがあろう。日本ではその現象が全国に展開され、野球競技の拡大普及発展に繋がっていた。しかし、中国ではその現象を見つけることができなかった。その原因としては、一部の大都市の数校の大学だけでしか野球が行われていなかったために、そこで誕生する野球経験者が少なく、大学以下の学校へ教員として赴任するものが少なかったことや野球技術経験不足による指導力も十分でなかったことが考えられる。また、中国は広大な国であり、一部の大都市だけの数校からでは、その大都市に広まるどころか全国に広まることは難しかったと考えられよう。さらに、大学の数校でしか野球がやられていなかったことは、野球道具の需要者も少なく、野球道具を作り販売するスポーツ産業も成り立たず、野球道具不足もその発展に影響があり、これは中等学校へ野球が組み込まれ

ていき、野球人口が急激に増えて、その需要に応えるために野球道具の製作と販売をするスポーツ店が誕生してくる程に発展する日本との大きな違いであろう。

天津日本租界での野球は、日本から野球経験豊富な選手であった優秀なコーチや有能な選手を呼び寄せて日本租界のチームにおける指導者や選手として迎え入れることにより、野球競技水準の向上を適確に図り、十分にその成果が得られたこと。また、野球競技を子供の時から小学生に奨励して野球の行う・観るの動機付けとして野球の楽しさを教えたこと。さらには、新聞社による野球報道による世論の盛り上げによる選手への動機付け、野球をやれる・観るグラウンド作りによる野球ファン獲得の成果によって天津日本租界の野球競技の拡大普及発展に大きく貢献したものと考えられた。このような天津租界における野球競技の拡大普及発展と野球競技水準の向上は、天津の中国人野球の野球競技水準の発展向上にも少なからず影響を与えたのではないかと考えられる。

しかし、天津では中国人による野球が日中戦争により15年間も行われず、その野球競技水準の低下を激しく起こし、天津における野球の拡大普及発展に大変大きなマイナスの影響を与えたものと推察された。当時の天津にて、南開大学や他の学校にて野球を行っていた若者達は15年間もの間、野球をすることができず、その間に野球のための身体能力の低下や野球技術の低下が起きたであろうことは十分に考えられる。この日中戦争による天津における中国人の15年間の野球中止は、天津野球に甚大な被害となり、天津の中国人による野球は戦後に全く野球初歩からの再スタートとなったものと考えられた。

注

注1) 1949年に新中国成立後、党と政府は体育運動の普及とレベル向上促進のための重要な施策として、運動競技会を開始した。1956年に国家体育委員会が「中華人民共和国運動競技制度暫定規定」を公布し、全国レベルの大会として”総合性運動会”を設けて4年毎に一度実施するもの

とし、1959年に北京で第1回全国運動会が開催された。(傅視農, 2008, pp. 111-113, pp. 136-138.)。中華人民共和国第13回全国運動会は2017年8月27日～9月8日まで中国の天津市にて開催された。

注2) CBLは、2008年に北京市で開催の北京オリンピックでのメダル獲得のために誕生した。中国はオリンピック開催国のため出場可能であり、これを中国政府は狙ってCBLを2002年に北京タイガース(北京市の代表チーム)、天津ライオンズ(天津市の代表チーム)、上海ゴールデンイーグルズ(上海市の代表チーム)、広東ライトニング(広東省の代表チーム、2003年からは広東レオパーズに変更)の4球団で結成したのである。中国政府としては、初めて中国野球協会(China Baseball Association: 以下CBA)へ力を注いだ。また、2005年には、四川ドラゴンズ(四川省代表チーム)と中国ホープスターズ(江蘇省代表チーム、現在江蘇ベガサス)の2チームが増えて、6チームでのリーグ戦となった。その後、2009年に河南エレファント(河南省代表チーム)が加わり、7チームとなった。当初CBLのゲームは、2002年は総試合数25ゲーム、1ヵ月間でホーム・アンド・アウェー方式、4チーム総当たり戦、勝ち点上位2チームによる決勝が行われ、優勝チームを決めた。その後、2003～2005年では72ゲームを4ヵ月間で実施し、優勝を決めた。2006年からは、各々3チームから成る西南華北地区と東南華東地区の2地区制とし、総試合数21ゲーム、両地区の1・2位とたすき掛けで3戦先勝のプレーオフによって勝ったチームが3戦先勝の最終シリーズを行い、優勝を決めた。松岡弘記(2015, pp. 47-48)。

注3) 天津ライオンズ(テンシン・ライオンズ)は、中華人民共和国天津市を本拠地とする中国野球リーグのチーム。西南華北地区に所属。本拠球場は天津道奇球場(ドジャースタジアム、ドジャースのピーター・オマリー前会長が寄贈した。観客席2500席、1986年に完成)。現在は、天津団泊球場(観客席3000人)。1975年第3回全国運動会優勝。1999年第9回全国運動会優勝。2002年中国シリーズ初代チャンピオン。2006年から中国シリーズ3連覇。2008年中国プロ野球としては初めて単独チームでアジアシリーズに出場。2011年中国シリーズ優勝。2017年第13回中華人民共和国全国運動会優勝。松岡弘記(2018, p. 29)、中国棒球協会公式サイト(2019)。

- 注4) 筆者撮影 (2009年5月撮影).
- 注5) 陈显明、梁友德、杜克和 (1990) 中国棒球运动史. 武汉出版社出版: 武汉 pp. 1-201.
- 注6) 川西玲子 (2014) 戦前外地の高校野球. 彩流社: 東京 pp. 1-326.
- 注7) 陈显明 (1991) 棒球运动在中国的兴起与早期发展. 成都体育学院学报: 第17卷第2期, pp. 21-25.
- 注8) 郭凤岐 (1994) 天津通志・体育志. 天津社会科学院出版社: 天津 p. 216.
- 注9) 天津市体育局編 (2017) 中国近现代体育史看天津. 人民体育出版社: 北京 pp. 1-348.
- 注10) 天津中华基督教青年会編 (2005) 天津中华基督教青年会与近代天津文明. 天津人民出版社: 天津 pp. 184-197.
- 注11) 郭凤岐 (1994) 天津通志・体育志. 天津社会科学院出版社: 天津 p. 216.
- 注12) 西村正邦 (2007) 天津租界故事記. 西村正邦: 大阪 pp. 1-187.
- 注13) 田中良平 (2005) 天津今昔招待席 - 租界、にんげん模様. 眺, pp. 89-94.
- 注14) 西脇良朋 (1999) 満州・関東州・華北中等学校野球史. 西脇良朋: 西宮市 pp. 220-317.
- 注15) 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和7年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社: 桂林 pp. 123-137.
- 注16) 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和8年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社: 桂林 pp. 204-239.
- 注17) 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和9年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社: 桂林 pp. 297-307.
- 注18) 日本体育協会 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京 pp. 1255-1261.
- 注19) 1871年 (明治4年) から1876年 (明治9年) までアメリカ留学し鉄道技術を学んだ平岡懋が、アメリカで覚えた野球を勤務先である新橋鉄道局の同僚に教えて組織したチームである。倶楽部は野球場を設け、会費を徴収してユニフォームを揃えたりして非常に組織的な活動をしていた。また、アメリカから規則書や用具を取り寄せ最新の野球をしており、この頃、慶應義塾、明治学院、工部大学校、青山英和学校、駒場農学校、東京大学などの学校に野球が広まったが、この倶楽部が学生の伝習所となっていた。(日本体育協会、最新スポーツ大事典 p. 1259.)
- 注20) 明治19年の中学校令を改めて中学校令を制定し、従前の尋常中学校を中学校と改称し、中等教育制度が整備された。(文部省、学制百年史 p. 298.)
- 注21) 大阪朝日新聞主催で大阪豊中球場にて全国10地区から73校が予選参加し、10校が出場して行われた。(加藤健次、2014甲子園データバイブル. p. 20.)
- 注22) 大阪毎日新聞主催で名古屋市八事球場にて選考委員会にて技量優秀な8チームを選考して行われた。(池田郁雄編、激動の昭和スポーツ史③高校野球上. p. 32.)
- 注23) 1927年 (昭和2年) から東京日々と大阪毎日新聞主催で全国都市対抗野球大会が東京で開かれることとなる。(日本体育協会、最新スポーツ大事典 p. 1259.)
- 注24) 6球団によるトーナメント制が甲子園球場にて始まった。翌年、東京に後樂園球場が完成し、8球団による春と秋の2シーズン制により行われた。(日本体育協会、最新スポーツ大事典 p.1132.)
- 注25) 当初、小学生および中学校低学年向けの野球のために神戸市の東神ゴム工業株式会社が尋常小学校 (1~6年)用は「毎日ボール」、高等小学校・中学校 (1~2年)用は「児童ボール」を製造した。やがて大人用としても使用され、広い年齢層にわたって普及し、野球が大衆化するのに大きな役割を果たしてきた。(日本体育協会、最新スポーツ大事典 pp. 924-925.)
- 注26) アヘンの密輸により、治安が悪化し、吸引と中毒をはびこらせて中国国内の銀を流出させて不況を引き起こしていた。1838年末に清朝政府の道光帝は林則徐を起用して広州に来航する外国商人から禁制品であるアヘンを取り上げ焼却した。アヘンを没収されたイギリス商人は本国政府を動かして遠征軍を派遣させアヘン戦争が始まる。(田中仁他、新図説中国近現代史. p. 24.)
- 注27) 1860年代から1894年までを「洋務運動」の時代と呼び、軍備の近代化、軍需工業およびその関連事業の創設推進、貿易はもちろん通交など直接の接触・交渉のほか、科学技術の導入や思想・教育など、西洋に関わる事象全体をさし、その導入を図った「運動」である。(田中仁他、新図説中国近現代史. p. 32.)
- 注28) 日本貿易振興機構 (2017) 天津スタイル. https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2017/5c9777cfa8e7bf3b/1-overview.pdf
- 注29) 1856年清朝によるアロー号という船の臨検と英国旗引き下ろしを口実にイギリス側が再び戦争

- をしかけ、広西省で宣教師を殺害されたフランスと共同出兵し、広州を占領して北上し、天津に迫った。清朝が和平交渉に応じて天津条約を締結したが、再び戦闘が始まり、英仏連合軍が北京へ侵入し、清朝が交渉し北京協定を結んで終結した。(田中仁他、新図説中国近現代史、p. 24.)
- 注30) 列強が新たに勢力を伸ばした華北で、排外の気運が高まり、教会や宣教師たちへの襲撃事件が相次いだ。このような人々を組織し「扶清滅洋」のスローガンを掲げて山東省で活動していた秘密結社の義和団が、天津・北京へ入って線路、駅舎、電柱など西洋のものを破壊、外国人・外交官を殺害し、清朝の正規軍と連合して外国公使館を包囲攻撃した。しかし、列強8か国軍が北京を占領し終結し、北京議定書が調印される。(田中仁他、新図説中国近現代史、p. 50.)
- 注31) 清朝翰林院の官吏であった厳修が天津に1904年に創設した私立中学堂。厳修は教師として、北洋水師学堂を卒業し、清朝海軍に勤務していた張伯苓を招聘した。1907年に市内西南の南開窪に移転すると、私立南開中学堂と初めて南開の名を名乗り、1919年には南開大学の直接の前身となる私立南開学校大学部が開設された。(中国の大学データベース、南開大学)
- 注32) 1919年に南開大学の初代校長となり、1948年まで校長を務める。(中国の大学データベース、南開大学)
- 注33) 中華民国は清の宣統2年(1910年)に開催された「全国学校区分隊第一次体育同盟」を「第1回全国運動会」として追認し、中華民国成立後の第1回の大会を第2回全国運動会とした。この大会は民国3年(1914年)5月21日~22日に北京の天壇で挙行され、陸上競技、サッカー、バスケットボール、庭球、バレーボール、野球の6種目が行われた。(笹島恒輔、中国の体育・スポーツ史、p. 149.)
- 注34) 南開学校大学部(天津市政协文史資料研究委員会等編、近代天津図志、p. 160.)
- 注35) 1937年7月7日の夜、北平近郊の永定河にかかる盧溝橋付近で日本の支那駐屯軍が夜間演習中に数発の銃声が鳴り響いたことに端を発する中国第29軍との衝突事件。これが引き金となり日中全面戦争が勃発した。(姫田光義他、中国近現代史 下巻、p. 382.)
- 注36) 1823年のモンロー大統領の「モンロー教書」に示された、アメリカ合衆国の外交理念。この考えはアメリカの外交政策の基本として、20世紀前半まで維持された。アメリカ合衆国はヨーロッパ諸国に干渉しないが、同時にアメリカ大陸全域に対するヨーロッパ諸国の干渉にも反対する、という思想。(世界史の窓 <https://www.y-history.net/appendix/wh1203-010.html>)
- 注37) アメリカとスペインとの間でおこった戦争。キューバの反スペイン独立運動支援と、ハバナ港における米軍艦メイン号の爆沈を口実に、合衆国から開戦した。キューバとともに、スペイン植民地のフィリピンも両国の戦場となった。(世界の歴史マップ <https://sekainorekisi.com/glossary/>)
- 注38) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 275.
- 注39) 鈴木芳太郎、最新天津市街図(昭和14年版)。
- 注40) 西村正邦、天津租界故事記、p. 124.
- 注41) 筆者撮影(2019年11月撮影)。
- 注42) 西村正邦、天津租界故事記、p. 125.
- 注43) 筆者撮影(2019年11月撮影)。
- 注44) 筆者撮影(2019年11月撮影)。
- 注45) 筆者撮影(2019年11月撮影)。
- 注46) 八木哲郎、天津の日本少年、pp. 54-55.
- 注47) 張健編、老建筑、p.123.
- 注48) 筆者撮影(2019年11月撮影)。
- 注49) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 346.
- 注50) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p.349.
- 注51) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、pp. 233-235.
- 注52) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 234.
- 注53) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、pp. 221-222.
- 注54) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 222.
- 注55) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 315.
- 注56) 西脇良朋、満州・関東州・華北中等学校野球史、p. 314.

参考文献

- 中国の大学データベース(2019)南開大学。<https://daxue.liuxue998.com/050201%20nankai%20ki%20.html#1>
- 池田郁雄編(1989)激動の昭和スポーツ史③高校野球上。ベースボールマガジン社:東京 pp. 1-194.

- 加藤健次 (2014) 2014甲子園データバイブル. メディアックス:東京 pp. 1-321.
- 川西玲子 (2014) 戦前外地の高校野球. 彩流社:東京 pp. 151-242.
- 郭凤岐 (1994) 天津通志・体育志. 天津社会科学院出版社:天津 pp. 216-217.
- 姫田光義、阿部治平、笠原十九司、小島淑男、高橋孝助、前田利昭 (1982) 中国近現代史 上巻. 東京大学出版会:東京 pp. 16-126.
- 姫田光義、阿部治平、笠原十九司、小島淑男、高橋孝助、前田利昭 (1982) 中国近現代史 下巻. 東京大学出版会:東京 pp. 382-402.
- 雷穆森 (2009) 天津租界史(插图本). 天津人民出版社:天津 pp.276-277.
- 松岡弘記 (2015) 中国野球の現状からみた中国での野球普及と野球競技レベル向上のための課題. 愛知大学体育研究室体育学論叢第22号 pp. 47-67.
- 松岡弘記 (2017) 2017年第4回 WBC と中華人民共和国第13回全国運動会における中国野球競技レベルの現状からみたそのレベル向上と普及・発展のための今後の方策. 愛知大学体育研究室体育学論叢第25号 pp. 7-30.
- 文部省 (1972) 学制百年史. 帝国地方行政学会:東京 pp. 1-1141.
- 日本貿易振興機構 (2017) 天津スタイル. https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2017/5c9777cfa8e7bf3b/1-overview.pdf
- 日本体育協会 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店:東京 pp.1-1403.
- 西村正邦 (2007) 天津租界故事記. 西村正邦:大阪 pp. 110-126.
- 西脇良朋 (1999) 満州・関東州・華北中等学校野球史. 西脇良朋:西宮市 pp. 220-317.
- 笹島恒輔 (1987) 中国の体育・スポーツ史. ベースボール・マガジン社:東京 pp. 1-206.
- 世界史の窓 (2019) <https://www.y-history.net/appendix/wh1203-010.html>
- 世界の歴史マップ (2019) <https://sekainorekisi.com/glossary/>
- 鈴木芳太郎 (1939) 最新天津市街図. アトラス社:天津
- 田中仁、菊池一隆、加藤弘之、日野みどり、岡本隆司 (2012) 新図説中国近現代史. 法律文化社:京都 pp. 1-282.
- 田中良平 (2005) 天津今昔招待席 - 租界、にんげん模様. 眺, pp. 89-94.
- 天津地域史研究会編 (1999) 天津市 - 再生する都市のトポロジー -. 東方書店:東京 pp. 135-207.
- 天津市体育局編 (2017) 中国近現代体育史看天津. 人民体育出版社:北京 pp. 225-228.
- 天津市政协文史資料研究委員会等編 (2004) 近代天津図志. 天津古籍出版社:天津 p.160.
- 天津中華基督教青年会編 (2005) 天津中華基督教青年会与近代天津文明. 天津人民出版社:天津 pp. 184-197.
- 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和7年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社:桂林 pp. 123-137.
- 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和8年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社:桂林 pp. 204-239.
- 天津圖書館編 (2006) 天津日本租界居留民團資料四「昭和9年共益会事務報告書」. 広西師範大学出版社:桂林 pp. 297-307.
- 八木哲郎 (1997) 天津の日本少年. 草思社:東京 pp. 54-55.
- 張健編 (2016) 老建筑. 天津古籍出版社:天津 p. 123.
- 陈显明、梁友德、杜克和 (1990) 中国棒球运动史. 武汉出版社出版:武汉 pp. 1-31.
- 陈显明 (1991) 棒球运动在中国的兴起与早期发展. 成都体育学院学报:第17卷第2期, pp. 21-25.
- 中国棒球協会官方网站 (2019) baseball.sport.org.cn/

